

外環状道路関係埋蔵文化財発掘調査報告書15

井相田D遺跡

—第1・3次調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第701集

2002年

福岡市教育委員会

外環状道路関係埋蔵文化財発掘調査報告書15

井相田D遺跡

—第1・3次調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第701集

2002年

福岡市教育委員会

序 文

玄界灘に面し、はるかアジア大陸をのぞむ福岡市は、古くから中国ならびに朝鮮半島との海外交流の窓口として栄えてきました。

福岡市では、市内に分布する多くの文化財の保護、活用に努めていますが、近年の開発事業に伴い、やむを得ず失われてゆく埋蔵文化財については、記録保存のための発掘調査を実施しています。

本書は福岡市博多区西月隈6丁目において実施された井相田D遺跡第1・3次調査の発掘調査報告書です。今回の調査においても多くの貴重な成果をあげることができました。

本書が文化財保護の理解を深める一助となり、併せて研究資料として活用いただければ幸いです。最後になりましたが、調査にあたり費用負担等のご協力を賜りました福岡北九州高速道路公社と国土交通省九州地方整備局福岡国道事務所をはじめとする関係各位に、心から感謝申しあげます。

平成14年3月5日

福岡市教育委員会
教育長 生田 征生

例　　言

1. 本書は外環状線道路建設に先立ち、福岡市教育委員会が博多区西月隈6丁目地内において実施した井相田D遺跡第1・3次調査の報告書である。
2. 遺構実測は佐藤一郎、上角智希がおこなった。
3. 遺物実測は佐藤、上角がおこなった。
4. 製図は佐藤、上角、久家春美がおこなった。
5. 第3次調査の第1面について、全景写真撮影と全体図の空撮図化を「写測エンジニアリング株式会社」に委託した。
6. 本書使用の方針はすべて磁北である。
7. 本書にかかる遺物・図面・写真は、すべて福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管される予定である。
8. 本書の執筆は第二章を佐藤、第一・三章を上角が担当し、編集は上角がおこなった。

遺跡名	井相田D遺跡 第1次調査		調査番号	9128	
所在地	福岡市博多区西月隈6丁目地内		調査略号	ISD-1	
開発面積	4900m ²	調査面積	4215m ²	調査期間	1991年9月25日～1992年3月9日

遺跡名	井相田D遺跡 第3次調査		調査番号	0037	
所在地	福岡市博多区西月隈6丁目地内		調査略号	ISD-3	
開発面積	1800m ²	調査面積	1650m ²	調査期間	2000年8月2日～9月21日

目 次

第一章 はじめに	1
1. 調査にいたる経緯	1
2. 調査組織	1
3. 位置と環境	4
第二章 第1次調査	7
1. 概要	7
2. 層序	8
3. 第1面	10
4. 第2面	10
第三章 第3次調査	19
1. 調査の概要	19
2. 基本層序	19
3. 第1面の調査	22
4. 第2面の調査	23
5. 第3面の調査	23
6. まとめ	25

挿図・図版目次

第1図 周辺の遺跡（1/50000）	2
第2図 井相田D遺跡の位置（1/6000）	3
第3図 明治33年の地形図（1/20000）	5
第4図 第1・3次調査地点の位置（1/1500）	6
第5図 井相田D遺跡第1次調査地域周辺図（1/1000）	7
第6図 井相田D遺跡第1次調査層位模式図	8
第7図 井相田D遺跡第1次調査I・II区遺構配置図（1/500）	9
第8図 井相田D遺跡第1次調査III・IV区遺構配置図（1/500）	10
第9図 S B10柱立柱建物実測図（1/40）	11
第10図 出土遺物実測図（1/3）	12
第11図 第3次調査北西壁土層図（1/80）	20
第12図 第3次調査第1面遺構配置図（1/250）	21
第13図 第3次調査出土遺物実測図（1/3、1/2）	23
第14図 第3次調査第2面遺構配置図（1/250）	24
第15図 第3次調査第3面の上層模式図	25

図版 1	I 区第1水田面（東から） I 区第1水田面東半部（南から）	I 区第1水田面全景（西から） I 区第1水田面西半部（南から）
図版 2	I 区第2水田面全景（東から） I 区第2水田面東半部（南から）	I 区第2水田面全景（西から） I 区第2水田面西半部（南から）
図版 3	I 区 S D01溝土層（東から） I 区南壁面上層（南から）	I 区西壁面上層（北東から） II 区畔確認状況（南から）
図版 4	II 区第1水田面全景（西から） II 区第2水田面全景（西から）	II 区第1水田面西半部（東から） II 区第2水田面全景（東から）
図版 5	III 区全景（南西から） III 区東半部（北から）	III 区全景（東から） III 区西半部（北西から）
図版 6	S B10柱立柱建物（南から） S D02遺物出土状況（南東から）	S K07土坑（南西から） IV 区第1水田面（東から）
	IV 区第1水田面（東から） IV 区下層（北東から）	IV 区第1水田面（南から） IV 区下層（南から）
図版 7	第3次第1面全景（南東から）	水田面（北東から）

第一章 はじめに

1. 調査にいたる経緯

現在、福岡市においては交通施設等の都市基盤が整備されないまま都市化が進行したため、交通量の増加に伴い慢性的な交通混雑が発生するなど多くの交通問題が生じている。そこで、このような状況に対処するため、自動車交通の効率的な分散を図り、福岡市西南部地域の交通混雑の緩和を図るとともに、福岡都市圏の外都を形成する目的で、福岡外環状道路（一般国道202号線）の建設が進行中である。この外環状道路は、福岡市西区福重から博多区立花寺までを結ぶ延長16.2km、幅員40mの道路であり、完成すれば福岡都市圏の骨格を形成する重要な幹線道路となる。

福岡外環状道路は東側の終点である立花寺において、国道3号線と合流する。同時に、その上を高架で走る福岡都市高速道路との接続も計画されており、立体交差の月隈インターチェンジが合わせて建設される予定である。

福岡市教育委員会では、この外環状道路の建設に伴い、国土交通省福岡国道工事事務所より調査の委託を受け、平成3年度より継続して発掘調査を実施している。今回報告する井相田D遺跡第1・3次調査は、この外環状道路I工区工事に先立って実施されたものである。ちなみに第1次調査は外環状道路関係最初の調査であった。第3次調査地点は、福岡都市高速道路と接続する月隈インターチェンジの建設予定地にあたっており、福岡北九州高速道路公社からも合わせて調査委託を受けた。

井相田D遺跡第1次調査は、平成3年9月25日から平成10年3月9日にかけて実施した。

第2次調査は平成8年9月5日から平成9年3月31日にかけて実施され、平成10年度に報告書が刊行されている。（福岡市教育委員会、1999、『井相田D遺跡－第2次調査－』、市報告書第610集）

第3次調査は、平成12年8月2日から平成12年9月21日にかけて実施した。

2. 調査組織

調査は以下の組織でおこなった。

調査委託 国土交通省九州地方整備局福岡国道工事事務所

福岡北九州高速道路公社

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 生田征生（3次調査・整理年度）

調査総括 文化財部長 柳田純孝（3次調査・整理年度）

埋蔵文化財課長 折尾 学（1次調査年度）、山崎純男（3次調査・整理年度）

調査庶務 谷口真由美（3次調査年度）、御手洗清（整理年度）

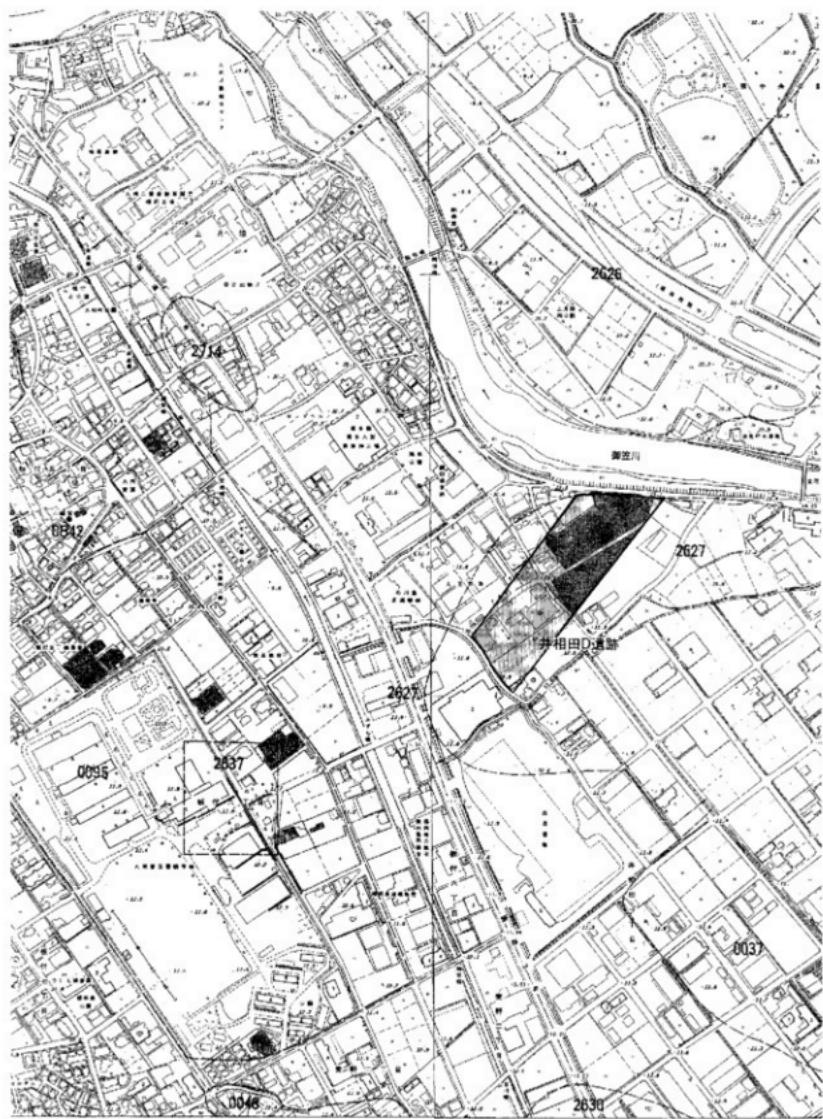
調査担当 佐藤一郎（1次調査）、上角智希（3次調査）

今回の調査がつつがなく進行し、多くの貴重な成果を得ることができたのは、発掘調査および整理作業に参加していただいた発掘作業員、整理作業員の皆様に依るところが大きい。毎日の重労働に快く、そして忍耐強く従事してくださいました皆様に、心から感謝申し上げる。



第1図 周辺の遺跡 (1/50000)

1. 井相田D遺跡
2. 比恵遺跡群
3. 那珂遺跡群
4. 鶴居遺跡
5. 枝付遺跡
6. 高畠遺跡
7. 宝満尾遺跡
8. 下月隈C遺跡
9. 天神森遺跡
10. 立花寺遺跡
11. 金隈遺跡
12. 井尻B遺跡
13. 麦野B遺跡
14. 麦野C遺跡
15. 南八幡遺跡
16. 錐削隈遺跡
17. 須玖遺跡群



第2図 井相田D遺跡の位置 (1/6000)

3. 位置と環境

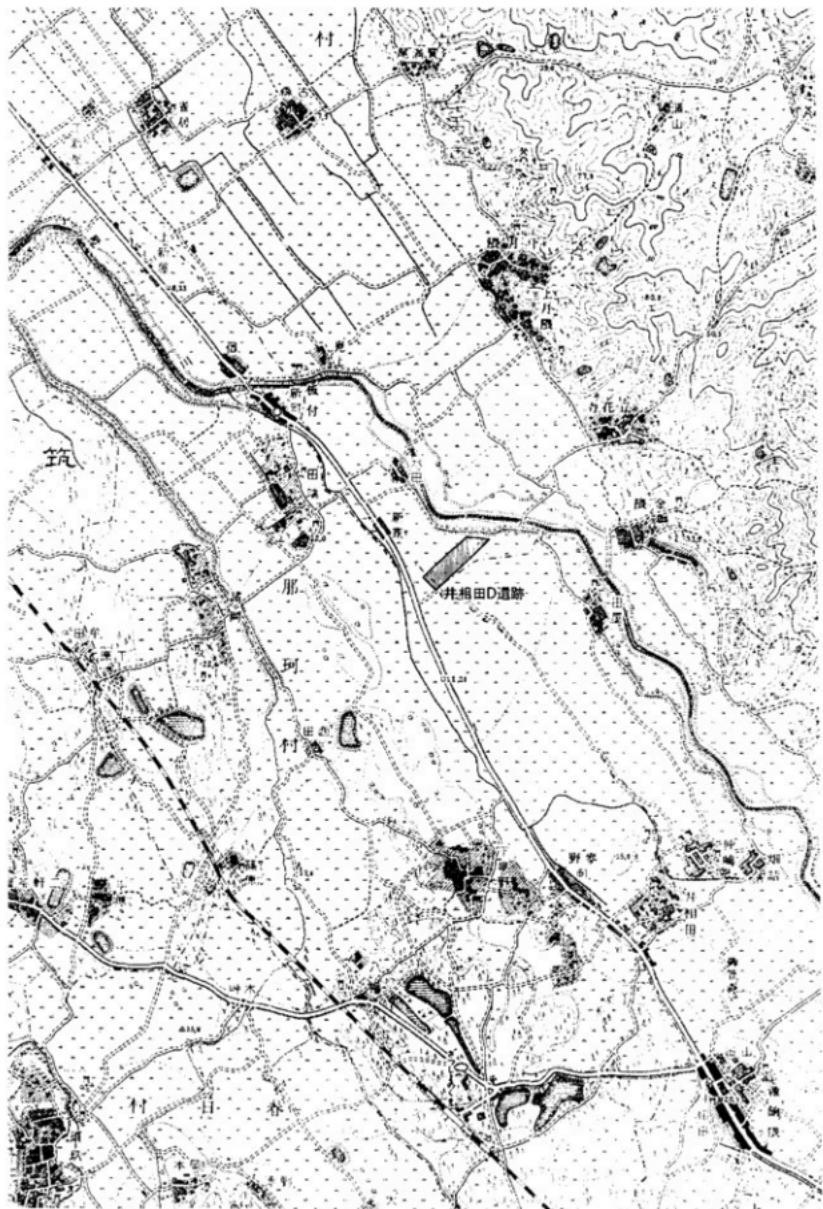
福岡平野は、北は博多湾に臨み、残りの三方は丘陵地帯によって囲まれ、その背後には標高300m～500mの立花山、三日月山、牛頭山、油山、叶岳、高祖山などを駆ぐ山地の尾根線が半円状にめぐっている。福岡平野を囲む主な丘陵を挙げると、東側に月隈丘陵、南に春日丘陵、南西に油山丘陵、西に早良平野とを画する干隈丘陵がある。平野には那珂川、御笠川、樋井川をはじめとする大小の河川が北流し、古来から肥沃な沖積地を形成していた。

井相田D遺跡は、御笠川中流域の左岸に位置する。明治33年の古地図（第3図）によれば、本遺跡の周辺一帯には広大な水田地帯が広がっており、小規模な集落が御笠川の自然堤防上と西岸から500mほど入った板付から麦野、八幡にかけて線状に点在する丘陵上の高まりに立地している。しかし、戦後に急速な都市化がすすみ、現在では住宅・工場・倉庫等が建てこみ、往時の風景は見る影も無い。調査地点は典型的な河川沿いの沖積地であり、現在は標高12mを測る。

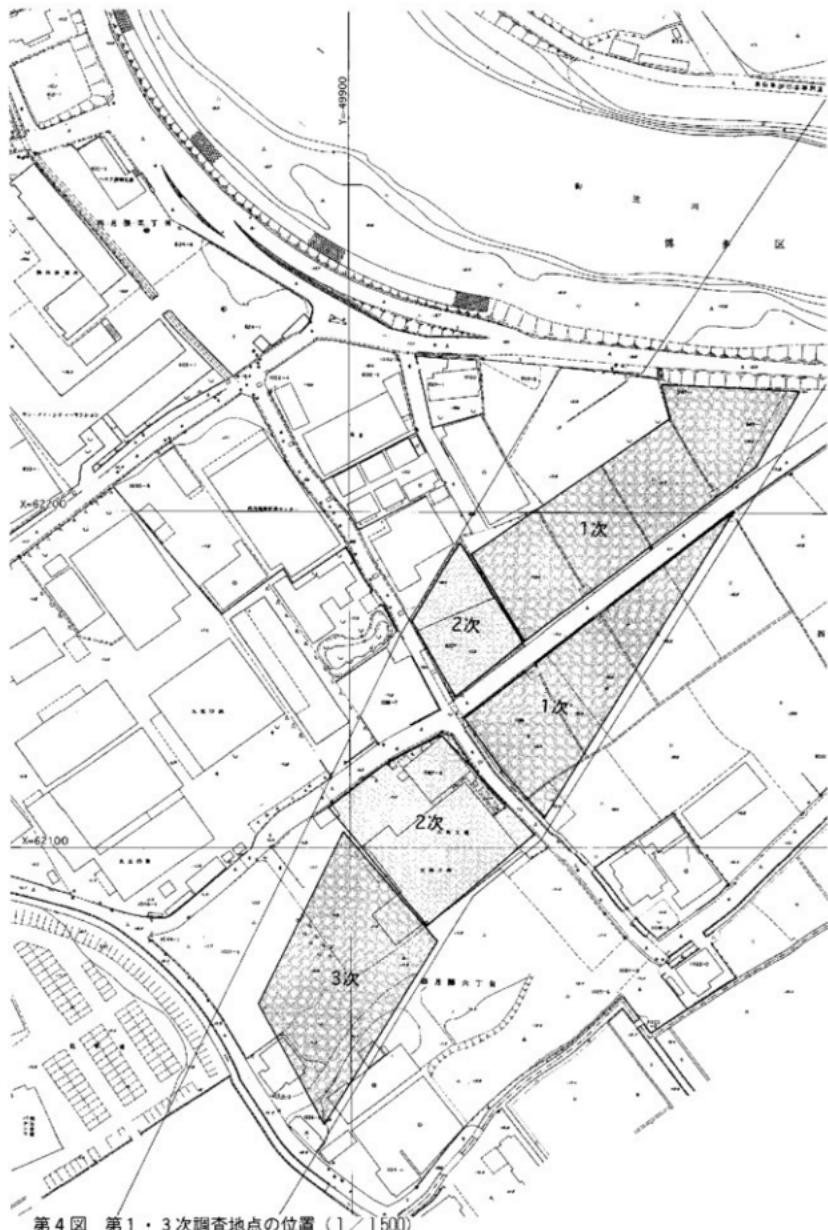
井相田D遺跡の調査は、2001年末段階で今回報告する第3次調査まで実施されている。すでに報告されている第2次調査の概要を示すと、古代から中世にかけての水田面6面を確認、そのうちの2面ないし3面について調査をおこなった。また水田面より下の青灰色粘土層上面において、弥生時代の池状構造、土壙等を検出、更にその下1.8mの厚く堆積した砂層の下で倒木や根株等を検出し、放射性炭素C14年代測定や出土遺物により縄文時代の埋没林もしくは森であることを確認した。（福岡市教育委員会、1999、「井相田D遺跡－第2次調査－」、市報告書第610集）

井相田D遺跡周辺の遺跡を概観してみよう。那珂川・御笠川流域は良好な沖積平野で農耕に適しており、弥生時代以来、連続として人々が生活を営み、多くの遺跡が集中している。現在では都市化が進み地形の細かな起伏は現地に立っても分かれるべくもないが、古地図を見ると、水田地帯の中の微高地に点々と集落が存在する姿が見える。弥生時代・古墳時代の集落も、やはりこれらの河岸段丘、開拓丘陵等の微高地に立地している。例えば、本遺跡の北西約1kmには環濠集落や縄文晩期の水田で有名な国指定史跡の板付遺跡が所在する。弥生時代の集落としては、ほかに比恵・那珂遺跡群や雀居遺跡、春日山須須遺跡群などがある。また、下月隈C遺跡は明治時代の古地図では、すでに水田になっているが、ここでも弥生時代の集落が見つかっている。弥生時代の墓地は、月隈丘陵近辺で多く発見されている。たとえば100基を超える甕棺墓群が発見された国指定史跡金隈遺跡や天神森遺跡、宝満尾遺跡がある。井相田D遺跡周辺では古代の大集落も多く発見されている。例えば、麦野B、麦野C遺跡、南八幡遺跡、御笠川東岸の立花寺遺跡などが挙げられる。また、雑餉隈遺跡では、7世紀末～8世紀初頭の方形の配置をもつ大型建物群が検出され、官衙的な施設と考えられている。

井相田の地誌について述べると、近世には筑前国那珂郡に属し井相田村と称した。村高は「慶長国絵図」262石余、「正保郷帳」293石余（田228石余、畠65石余）、「元禄国絵図」293石余、「天保郷帳」343石余である。明治初期に集落は本村、雄前ノ隈、向園、原に分かれ、戸数69戸、人口320人、田23町、畠10町、山林14町である。明治22年には戸数30戸、人口238人、地籍は田36町、畠5町、山林11町など計62町である（『角川日本地名大辞典40福岡県』）。井相田（いそだ）の地名の由来については、「葦・沢・田」であり、この地が昔は草木が生い茂った湿地であったことに由来するという説がある。



第3図 明治33年の地形図 (1/20000)



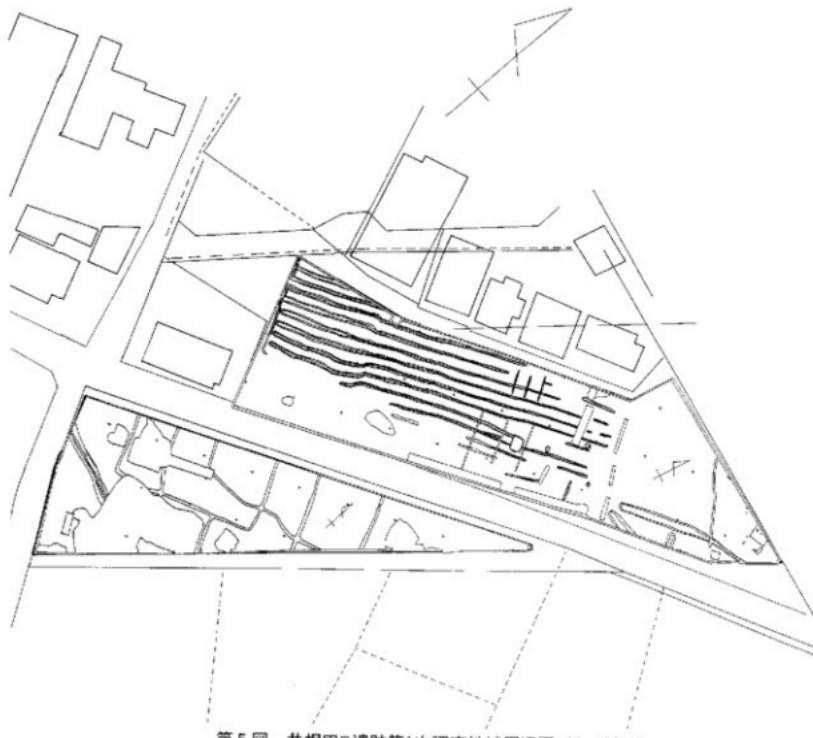
第4図 第1・3次調査地点の位置 (1/1500)

第二章 第1次調査

1. 概要

調査区域はほぼ中央を東西に横断する現道によって南北に二分され、排土は調査区域内で、処理しなくてはならない都合上、南北それぞれの調査区打って替えをして調査することになった。南側調査区の西側をⅠ区、東側をⅡ区、北側調査区の東側をⅢ区、西側をⅣ区とし、Ⅰ区からⅡ・Ⅲ・Ⅳの順に調査を行った。計4,900m²を調査対象とした。

調査区域全域は用地買収の以前は水田として利用され、用地買収後は盛土がなされていた。福岡国道路工事事務所と協議して、Ⅰ区およびⅡ区上の盛土は発掘調査に入る前には撤出してもらった。1991年(平成3年)9月25日にバックホーによる表土剥ぎを開始し、10月1日から発掘作業員を投入した。広範囲にわたって川砂採取による擾乱を受けていたが、調査では2面の水田面が検出された。上層で検出された水田の畦畔は条里に沿った方格地割りをもつ。一筆10m²前後の小区画の畦畔から構成され、坪界の大畦畔、水路はⅠ区の範囲内ではみられなかった。下層検出の畦畔も同様に条里に沿った方格



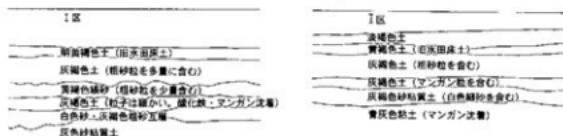
地割りをもつが、上層検出のものより区画が大きく直線的ではない。調査区の南西部で水路を検出したが、取排水口・井戸等の水田と関連する施設は調査区の範囲内では検出されなかつた。水路の北側は一段高く土手状をなす。造営の時期は上層水田が12世紀後半から13世紀前半、下層水田は11世紀前後と考えられる。I区の調査面積は920m²。

I区からI区への排土送りおよびII区の表土剥ぎは11月11日に開始し、11月14日から発掘作業員を再び投入し遺構の検出にかかった。I区と同様に2面の水田面が確認された。上層で検出の水田は東端部で擾乱を受けていたが、方格地割りをもつ坪界の南北方向の大畦畔、部分的に一筆10m²前後の小区画の畦畔を検出した。南北方向の大畦畔は両脇に偏溝をもつ。調査区周辺の道路、水田畦畔には条里地割りが今日に至るまでよくとどめられており、1町西側の南北方向の大畦畔、それと直交する東西方向の大畦畔は現道下であろう。II区の調査面積は615m²。

12月11日からの現道北側の調査区III・IV区に仮置きされた残土撤出の後、12月24日からIII区の表土剥ぎを開始し、同日より発掘作業員も投入し遺構の確認にかかった。III区東側では水田面は確認されず、東端には遺物包含層（黒色土）が残っていた。包含層下面では溝、土坑、柱穴・ピット状遺構を検出した。11世紀前後の土師器小皿・黒色土器碗片の他、ピット状遺構から越州窯系青磁瓜裂り合子片が出たした。III区の調査面積は1830m²。IV区からIII区への排土送りおよびIV区の表土剥ぎは翌1992年（平成4年）2月1日に開始し、発掘作業員も追って投入し遺構の検出にかかった。調査区の北西隅では水田上面に粗砂が比較的厚く堆積し、明瞭に畦畔を確認することができたが、上層で水田遺構が検出されたのは、西端部にとどまる。水田面下層を掘り下げる際に、天祐通寶（初鉄年1018年）が出土した。2月6日から下層の遺構検出にかかった。遺構上面には砂が堆積しているが、水田面は確認されなかつた。白色細砂を埋土にもつて畠の畠溝とみられる溝状の遺構を検出した。水田面と同様に砂が堆積した足跡（そのほとんどは牛跡）が散在している。2月28日には実測等現場での作業を終了し、3月6日から埋め戻しを開始、3月9日に終了した。IV区の調査面積は850m²。I区からIV区合計で対象面積4,900m²の中4,215m²を調査した。

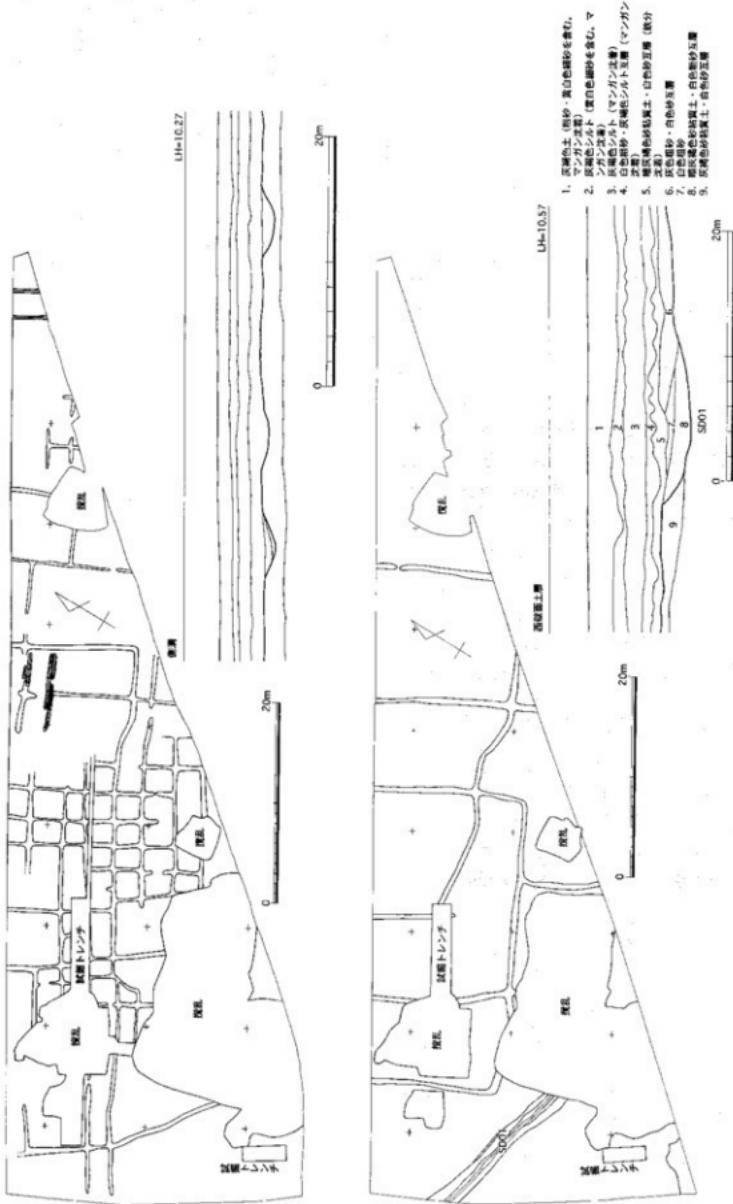
2. 層序

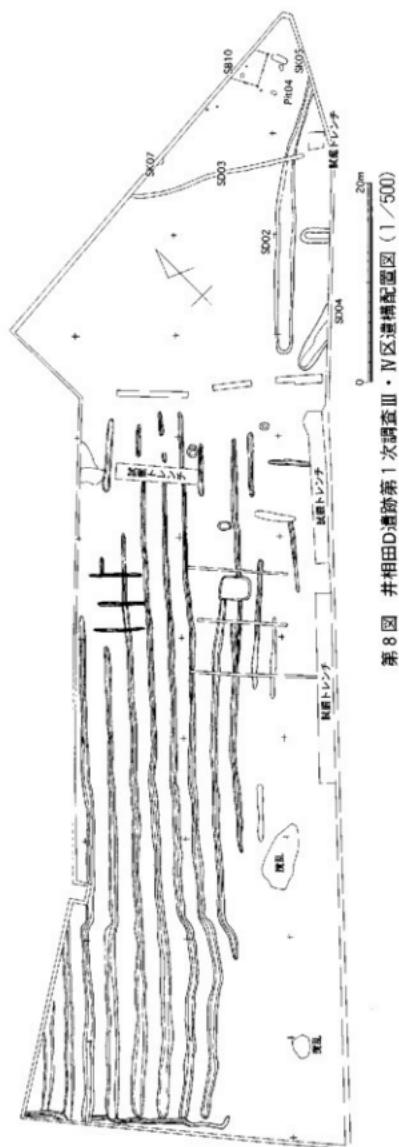
旧水田耕作土から約40cm下の黄褐色細砂などの洪水によって運ばれた土砂の下層で第1水田面を確認することができる。調査区の東側では水田上面の粗砂の堆積が薄く、畦畔を確認することができなかつた。第1水田面下層の灰褐色土層には酸化鉄やマンガンが沈着している。その下層には洪水砂の白色砂・灰褐色砂の互層がひろがり、第2水田面（灰色～青灰色粘質土上面）を覆っている。畦畔の残存は良好ではなく、その高まりはいずれも低い。



第6図 井相田D遺跡第1次調査層位模式図

第7図 井相田D道路第1次調査I・II区測量配置図 (1/500)



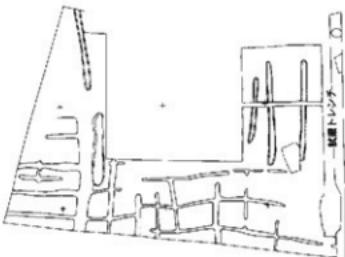


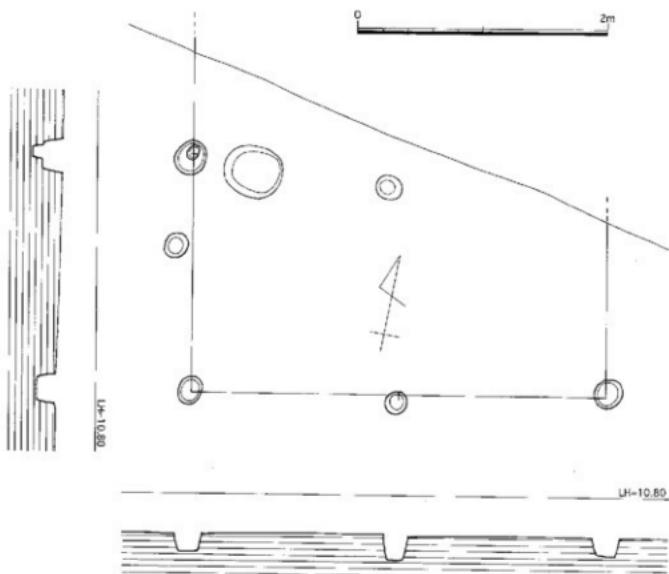
3. 第1面 (第7・8図、図版1・4)

I区、II区西側、IV区北西隅上層では水田上面に粗砂の堆積が比較的厚く、明瞭に水田畦畔を確認することができた。条里に沿った方格地割りをもつた一筆10m²前後の小区画の畦畔を検出した。II区東端では坪界の南北方向の大畦畔を検出した。大畦畔は両脇に側溝をもつ。側溝は幅55cm、深さ10cm、両溝間の心々距離は2.7mを測る。II区では延長4mを測った。溝の埋土は灰褐色砂で、III区東側では、その延長が予想されたが一端とみられる溝を延長4m検出したにとどまる。水田上面の粗砂や水田面下層の灰褐色土からは土師器小皿、瓦器碗片、白磁片、龍泉窯系青磁片が出土しており、水田造営の時期は12世紀後半から13世紀前半にかけてと考えられる。

4. 第2面 (第7・8図、図版2~4)

I・II区では条里に沿った水田畦畔を検出したが、上層検出のものより区画が大きく直線的ではない。I区の南西部で水路を検出した。ほぼ直線的な東西溝で、水田畦畔と異なり条里の方位を取らず真北方向に直交している。幅0.8~1.2m、深さ25~40cmを測り、調査区域内では延長16mを測った。底面の傾斜はほとん





第9図 SB 10掘立柱建物実測図 (1/40)

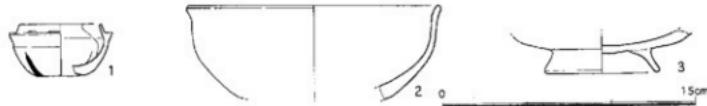
どなく、標高は9.2m前後を測る。取排水口・井堰等の水田と関連する施設は未検出である。水路の北側は一段高く土手状をなす。

III区東側では洪水による土砂の堆積は確認されず、東端では遺物包含層(黒色土)を確認した。包含層下面では溝、土坑、柱穴・ピット状遺構を検出した。遺構からは11世紀前後の土師器小皿・黒色土器碗片の他、ピット状遺構土器碗片が少量出土した。特殊なものではPit04から越州窯系青磁瓜割り合子片が出土している。散在している柱穴から掘立柱建物1棟を復元した。

掘立柱建物SB 10 (第9図、図版5)

調査区の東端に位置する。1×2間分の4個の柱穴を検出した。主軸の方針は真北に近い。建物の北側は調査区域外に及び、桁、梁いずれの方向になるのか不明である。東西長3.4m、柱間の距離は東西で1.7m、南北で1.9mを測る。柱穴は径20~25cmの円形掘り方をもち、深さ15~25cmをはかる。

III区西側からIV区にかけて白色細砂を埋土にもつ畑の畝溝とみられる溝状の遺構12条を検出した。幅0.5~1.2m、深さ5~7cmを測る小溝で、最長のもので延長70mを測る。2m前後の心々距離を取つてほぼ直線的に平行に走るが、内5条は調査区西端から20mの位置で鈍角に屈曲する。水田面と同様に砂が堆積した足跡(そのほとんどは牛跡)が散在している。



第10図 井相田D遺跡第1次調査出土遺物実測図 (1／3)

出土遺物 (第10図)

越州窯系青磁 合子 (1) 体部側面に片切り彫りを入れ瓜割りとなしている。胎土は灰黄色(2.5Y6/2)、釉色は灰オリーブ色(7.5 Y6/2)を呈する。外面の口縁部立ち上がりから蓋受け部にかけてと内面の一部は露胎である。蓋受け部に目跡が残る。器周1/3残存からの復元口径4.8cm、受け部径6.0cm、器高3.1cmを測る。Ⅲ区Pit04からの出土である。

黒色土器 楠 (2) 丸みをもった体部から口縁部が直立気味に立ち上がり、口縁端部で外反する。内外面ともヘラ磨きされる。胎土は精良で、黒色(2.5Y 2 /1)を呈する。器周1/6残存からの復元口径15.0cmを測る。底部は欠失している。Ⅲ区SD04からの出土である。

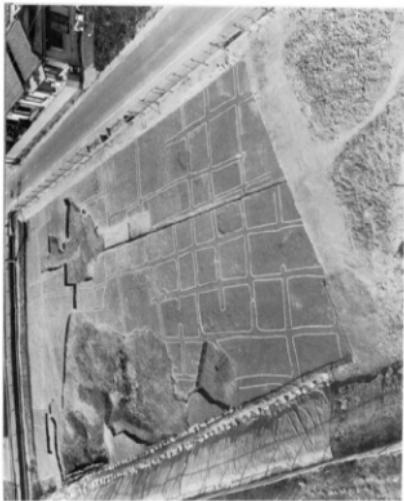
土師器 楠 (3) 細形に開く高台を貼り付けた底部の破片資料である。胎土には砂粒を含み、灰白色(10YR8/2)を呈する。高台径6.8cmを測る。Ⅲ区遺構面上面からの出土である。



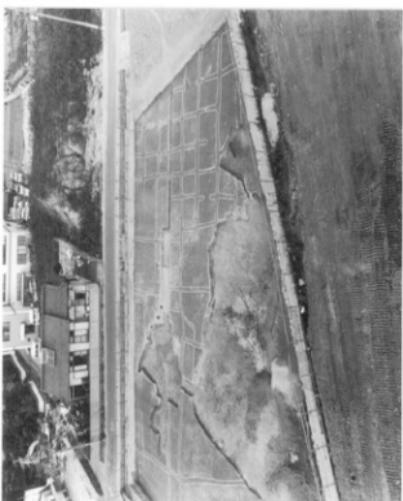
I区第1水田面全景（西から）



I区第1水田面西半部（南から）



I区第1水田面（東から）



I区第1水田面東半部（北から）

図版 2



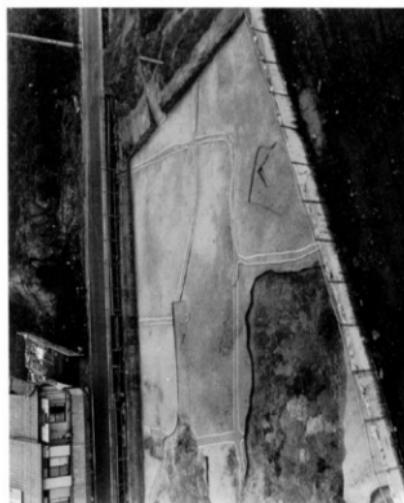
I区第2水田面全景（西から）



I区第2水田面西半部（南から）



I区第2水田面全景（東から）



I区第2水田面東半部（南から）

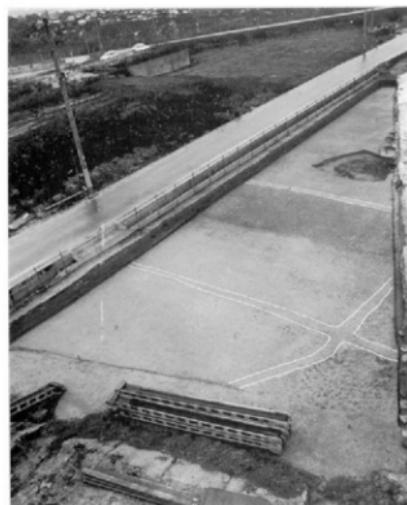




II区第1水田面全景（西から）



II区第1水田面西半部（東から）



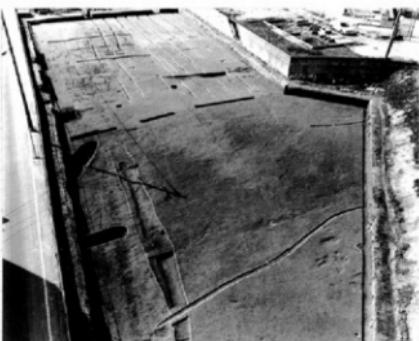
II区第2水田面全景（西から）



II区第2水田面全景（東から）



III区全景（南西から）



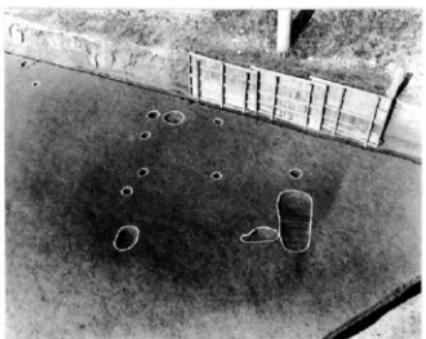
III区全景（東から）



III区東半部（北から）



III区西半部（北西から）



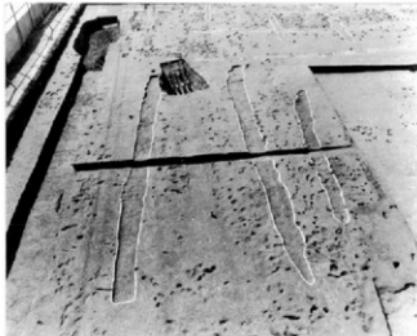
S B10掘立柱建物（南から）



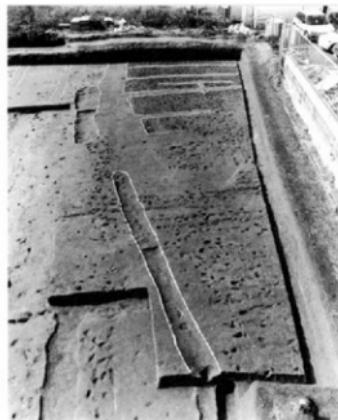
S K07土坑（南西から）



S D02遺物出土状況（南東から）



IV区第1水田面（東から）



IV区第1水田面（東から）



IV区第1水田面（南から）



IV区下層（北東から）



IV区下層（南から）

第三章 第3次調査

1. 調査の概要

井相田D遺跡第3次調査地点は福岡市博多区西月隈6丁目地内に所在する。外環状道路建設予定地である北東側隣接地では平成8年度に第2次調査が行われており、本調査時には道路建設工事が進行中であった。今回の調査では調査期間が限られるため、第2次調査地点でおこなわれたような5面にわたる発掘調査は不可能であり、埋蔵文化財課内で調査の進め方について協議をおこなった。水田面については各水田面の畦畔がほぼ重なり大きく変化していないことから、最も古い時期の水田面（第2次調査の第3面）1面についてのみ調査をおこない、水田の残存状況および畦畔の方向等の状況を確認することとし、弥生時代、繩文時代埋没林の遺構面と合わせて、計3面について調査を実施することで決定した。また、調査期間短縮のために、第1面の調査区全体図については写真測量を委託することにした。

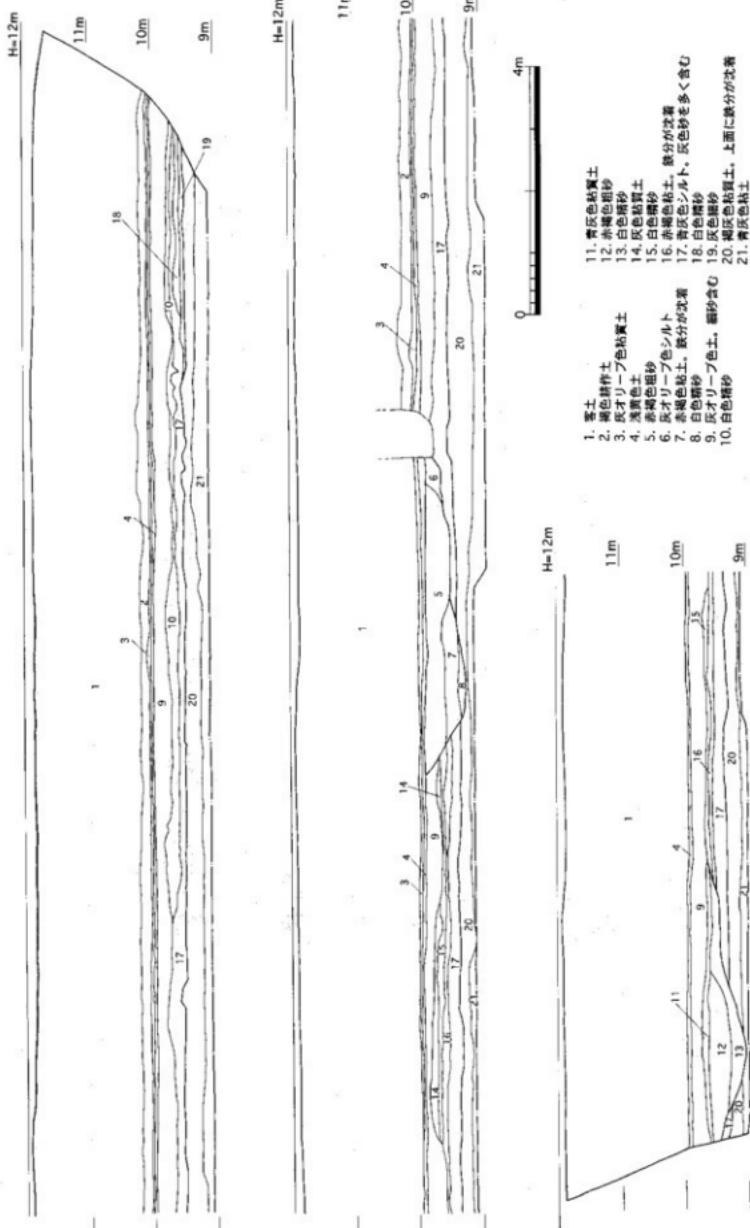
発掘調査は平成12年8月2日から平成12年9月21日にかけて実施した。調査面積は1650m²である。条件整備が充分整わないまま調査に入ったために調査作業員が集まらず、他の発掘現場から短期間ずつ応援に来ていたいただいた。ご協力いただいた関係各位に感謝申し上げる。

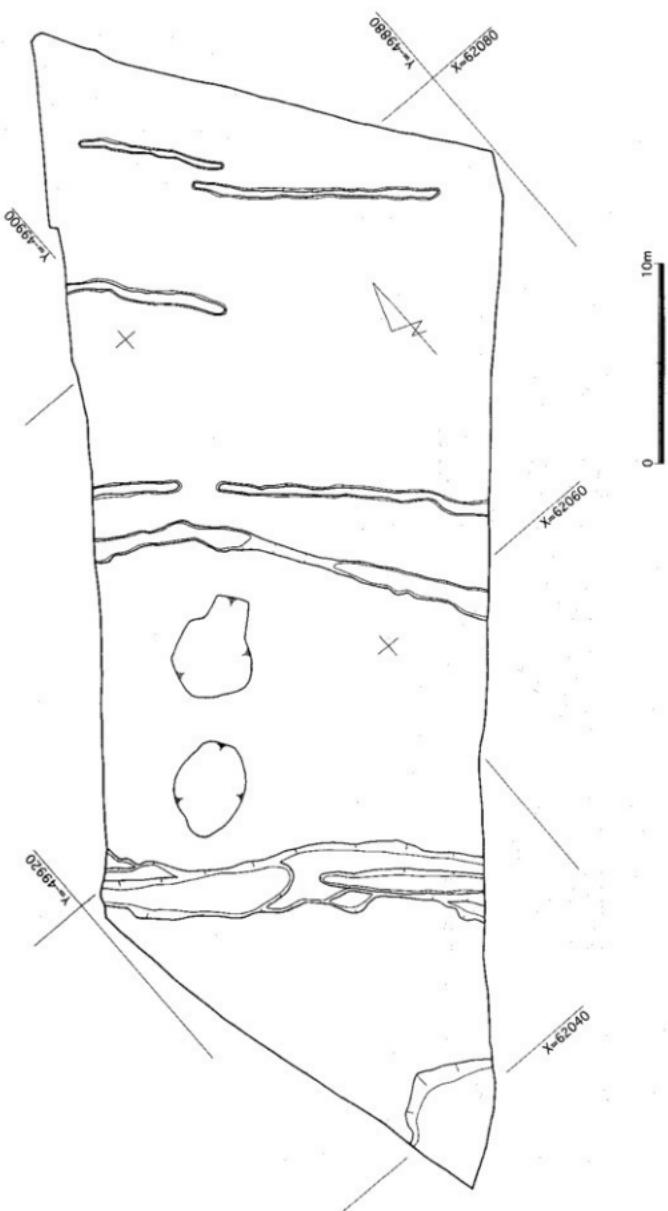
調査の結果、第1面では古代末～中世前期の水田面を検出した。調査区西側に河川の氾濫流路が通り、水田の残存状況は悪い。青灰色粘土層上面の第2面では、溝状遺構1、ピット1を検出ましたが、遺物は全く出土しなかった。第3面のトレンチ調査では根株2点のほか自然木片が少量出土した。

2. 基本層序

調査区北西壁の土層図を図示する（第11図）。現地表面は標高約11.9mである。地表下170cmの標高10.2mまでは表土ならびに客土（1層）である。1層は戦後の水田埋め立て以降の土である。2～4層は埋め立て前まで使われていた水田にある。以下、砂層と粘質土が互層に堆積するが、概して各層とも薄く不安定である。この土層の堆積状況は、ここが水田地帯であったが度重なる河川の氾濫により幾度も水田が砂に埋もれたこと、そのたびに新たに水田を作り直して長期にわたって水田が営まれたことを示している。水田面と確認できるのは2層、9層、14層、17層、20層の各層の上面である。

水田の面数は部分により異なるが、現代の水田面である2層上面を含めて、3～5面存在する。2ヶ所に新しい時期の河川氾濫に伴う自然流路があり、その周辺で粘質土と砂層の互層堆積が複雑になる。20層が最も古い水田の層であり、この上面を第1面に設定した。その下は青灰色粘質土（21層）が堆積する。20層と21層の差は土壤の化学変化によるものと思われ、その境界は漸移的である。21層の上面に第2面を設定した。21層以下については、第3面としてトレンチ調査をおこなった。21層の青灰色粘土は90～95cmの厚さで堆積しており、その下は灰色～白色の砂層で、その境界で大量の湧水をみた。





第12図 第3次調査第1面進機配置図 (1/250)

3. 第1面の調査

現地表面下約240cm、標高9.5m前後で検出した最下層の水田面を第1面とした。第2次調査Ⅱ区の第3面に対応する。

面を設定するにあたり、まず第2次調査と接する調査区北東壁を重機で掘り下げて土層の堆積を確認した。現代の水田面を含めて4面の水田面が存在したが、調査期間の制約から最下層の水田面のみ調査することにした。よって、最下層の水田面（20層上面）を第1面に設定し、水田面の上に5～15cmの厚さで堆積している灰色～白色砂層の面まで重機で掘り下げることにした。実際には3mほど進んだ所で砂層がなくなり、灰色砂を多く包含する青灰色シルトが直上層となつたので、引き続きこの層を残しながら上部の土を剥いでいった。その後、人力で水田面の検出作業をおこなつた。検出した水田の土は、黒褐色粘土を基本とするが、部分的に白色砂粒を多く包含してざらざらした、粘性の弱い黒褐色粘質土が存在する。水田面間の洪水砂の堆積が薄く不安定であるため検出作業は難航したが、微妙な土色やしまり具合の違いをもとに畦畔の検出に努めた。調査面積は上場（現地表面）で1650m²、下場（遺構面）で1030m²である。

検出構造（第12図）

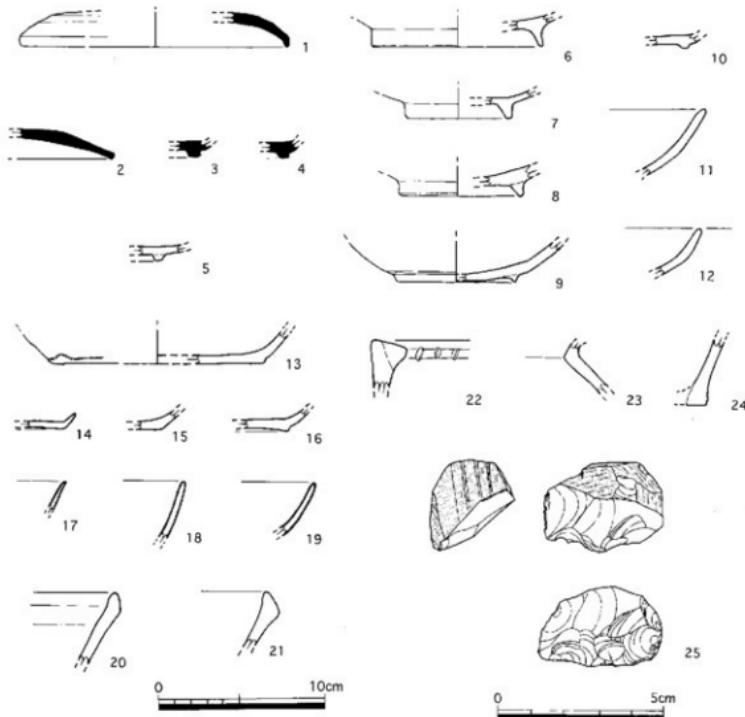
第1面では、調査区東半において磁北から50°前後西偏する方向（N-50°W）に走る3本の畦畔を検出した。本来これと直交する方向の畦畔も存在したであろうが検出できなかつた。東端の畦畔は最大幅50cm、高さ6～8cmで水口を有する。残りが悪く南北端は途中で途切れる。中央の畦畔は最大幅60cm、高さ3～7cmで南側は途中までしか検出できなかつた。西端の畦畔は最大幅50cm、高さ4～7cmを測り、水口を有する。

調査区西半では2本の自然流路を検出した。河川の氾濫時にできた流路である。北西壁土層図で分かるように、この氾濫流路は第1面よりも新しい時期のものである。

畦畔の遺存状況が悪いために、水田区画の形状、規模については不明である。畦畔間の距離は東側が約6m、西側が約8mである。調査区中央近辺では多数の人間の足跡が検出された。水掛りの関係で述べると、水田面の標高はほぼ平坦であるが、西側に行くにつれて徐々に高くなり、東端と西端の比高差は12cmを測る。

出土遺物（第13図）

コンテナ1箱の遺物が出土した。弥生時代と10世紀から12世紀にかけての土器が出土している。いずれも小片で磨滅がすんでいる。1～4は須恵器である。1・2は壺蓋で、1は復元口径16.0cmを測る。いずれも稜が不明瞭。3・4は壺の底部片である。壺底の端部に高台を貼り付ける。5は内黒の黒色土器A類の楕である。6～12は土師器の楕である。6～10は底部片で高台を有する。11・12は口縁部片。13～16は土師器の壺である。13～15は底部ヘラ切り、16は糸切りである。17は白磁碗の口縁部片、18・19は青磁碗の口縁部片である。20は瓦質土器こね鉢の口縁部片、21は東播系の擂鉢の口縁部片。22～24は弥生土器である。22は口縁部片で外面に粘土を貼り肥厚させ、刻印をついている。23は壺の頭部、24は平底の底部片である。25は黒曜石の石核である。自然面が多く残るが、丸みを帯びている。松浦半島の御美ヶ谷池産の黒曜石と考えられる。これらの遺物は第1面の水田に伴うものではなく、河川の氾濫時に流されてきたものである。したがって、第1面の時期は正確には分からぬものの、土師器・須恵器等の年代をあてて、古代末～中世前期の水田としておく。



第13図 第3次調査出土遺物実測図 (1/3、25は2/3)

4. 第2面の調査

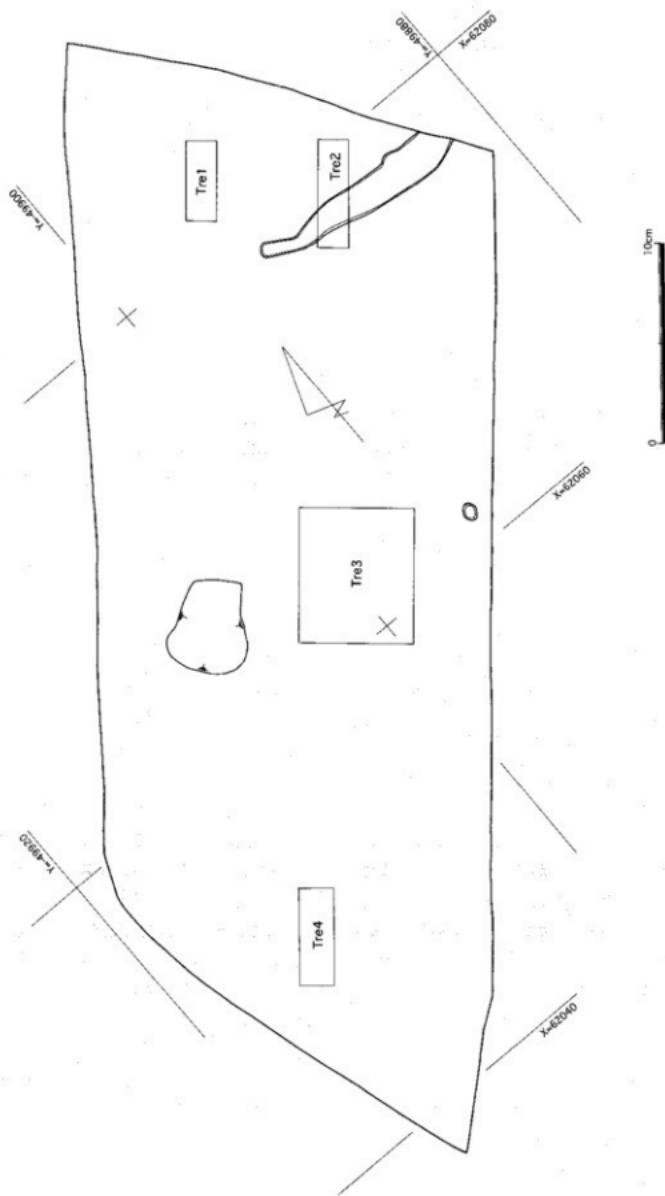
第2面は、第1面より約20~50cm下の青灰色粘土層上面に設定した。標高9.0~9.3mで、第2次調査II区の第4面に対応する。調査面積は970m²。第2次調査では池状遺構や土壌を検出し、弥生土器、木製農工具等が出土している。

調査区東北側で溝状遺構1、中央の南東壁沿いでピット1を検出した(第14図)。溝状遺構は最大幅2.7m、深さ5~10cmを測り、埋土は暗褐色粘質土で砂粒をまばらに含む。遺物は出土していない。

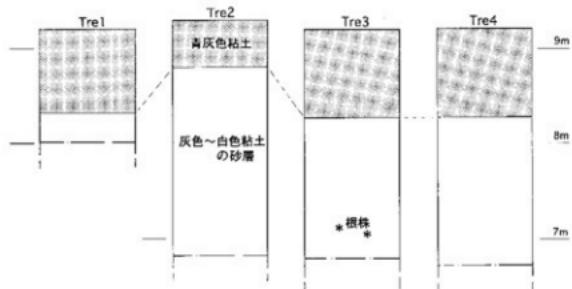
5. 第3面の調査

第2次調査において、青灰色粘土層の下1.8mの深さで根株、倒木等が発見され、縄文時代の埋没林として話題をよんだ。この埋没林の有無を確認する目的で第3面の調査をおこなった。

調査は重機を使ってのトレーナー調査となった。良好に遺存していれば人力による調査を実施する予定であったが、遺存状況が良好でない上に、湧水レベルが高く作業中の土砂崩壊の危険が予測された



第14圖 第3次調查第2面遺構配置圖（1／250）



第15図 第3次調査第3面トレンチの土層模式図

去した時点で湧水がはじまる。砂層は灰色～白色を呈し分層が可能であるが、湧水が激しく詳細に記録できなかった。

第1トレンチは120cm下げた段階で湧水に耐えられず崩壊した。

第2・4トレンチは第2面から250cm掘り下げたが、木片は出土しなかった。

第3トレンチでは、第2面から210cm程度の深さ、標高7.2mにおいて根株2つと少量の木片が出土した。加工はされていない。

第2・4トレンチは第2次調査の埋没林検出レベルより相当掘り下げているので、埋没林はないと考えるのが妥当であろう。調査の結果、調査区の一部に根株が点在して存在するようである。

6.まとめ

井相田D遺跡第3次調査では3面について調査をおこなった。

第1面は古代末～中世前期頃の水田である。調査区東半で並走する3条の畦畔を検出したが、遺存状況はよくない。おそらくこれらの畦畔と直交する畦畔が存在していたはずだが、こちらは確認できなかった。そのため、水田区画の形状・規模については明らかに出来なかつた。調査区西半では2本の河川氾濫時の流路を検出したが、これらはこの水田面より新しい時期のものである。弥生時代と10世紀～12世紀にかけての遺物がコンテナ1箱分出土した。壁面土層では最下層にあたる第1面の水田面を含めて、3～5面の水田が確認できる。水田間の砂層の堆積は薄く不安定である。古代末以来、現代まで連続と水田が営まれており、御笠川中流域に位置するこの地域が古くから良好な水田地帯であったことが裏付けられる。

第2面の青灰色粘土層上面では溝状遺構1、ピット1を検出したのみで遺物は全く出土しなかつた。

第3面は4ヶ所のトレンチ調査であるが、その1つから根株2つと木片少量が出土した。しかし、ほかのトレンチでは木片は出土しなかつた。根株は部分的に点在するほどの密度と予想され、第2次調査で発見された埋没林は本調査へは広がっていないようである。

ので、トレンチ調査のみで終了した。

トレンチは4ヶ所に設けた（第14図）。各トレンチの土層模式図を第15図に示す。青灰色粘土層は全般に90～95cmの厚さで堆積している。第2トレンチのみ極端に浅い。その下は砂層が厚く堆積しているが、粘土層を除

図版 7



第3次第1面全景（南東から）



水田面（北東から）

外環状道路関係埋蔵文化財発掘調査報告書15

井相田D遺跡

—第1・3次調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第701集

2002（平成14年）3月5日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8-1
☎ (092) 771-4667

印刷 正光印刷株式会社
福岡市西区周船寺三丁目28-1
☎ (092) 806-5708
